

英語多読の効果

—村田女子高等学校における実践例—

長森 清

はじめに

本校では2011年度から特進コースにおいて英語多読に取り組んでいる。本誌 No. 68 にてすでにある程度述べたが、その後の活動の継続により、さらなる成果を得ることができたので、改めて導入に至った経緯およびその効果をここに記すことにしたい。

英語多読を導入した背景には、まず初めに英語の長文に苦手意識をもっている生徒が多かったことがある。そのような生徒は英文を読むことに不慣れで、英語に接する絶対量が不足していた。次に、1語1語または1文1文の意味を正確に取り、日本語に訳さないと安心せず、英文を読むのに時間をかけ過ぎてしまう傾向が見られた。「読む」と「訳す」ことは、全く別の作業であるため、直読直解の訓練が必要であった。また、英語の得意な生徒と苦手な生徒の差があったこともあり、同じ教材で同じことを教えていく一斉授業の形式だけでは、双方のためにならないと考え、授業を補うために多読を導入するに至った。

英語多読を実施するうえでの目標を以下の4つ設定した。

- ① 英文に慣れることで、読まされているという受身的な姿勢から、生徒が自発的に英文を読むもうという態度を養う。
- ② 多くの英文に触れることで、インプット量を増やし、文法力や語彙力を身につけ、リーディング力を総合的に伸ばす。
- ③ 英語の本を読めるという自信をつけ、さまざまな分野の本を読むことで教養を身につける。
- ④ 大学入試における英語長文を抵抗なく読みこなせるようにして、さらに大学入試の先にある社会における英語運用能力の土台を養う。

2年間という期間におよぶクラス単位での実践報告が稀であること、また、同じ学力水準の生徒を対象とし、多読を行った生徒と、多読を行っていない

生徒を比較し、実践報告をすることに意義があるのではないかと考えたことから、今回、改めて本稿に英語多読についてまとめることとした。本校における英語多読による成果を、簡単ではあるが、少し述べてみたいと思う。

大学入試センター試験の現状

近年の大学入試センター試験における設問を含めた総語数の推移は下記のとおりである。

大学入試センター試験総語数の推移

年	2009	2010	2011	2012	2013
総語数	4,362	3,533	3,748	4,044	4,295

本文と選択肢を含む総語数は4,000語前後であり、80分の試験時間中、50分で英語を読み、30分で問いに答えるとすると、2013年度は毎分85語以上の読解スピードが要求される。

また、下記が示すのは、第3問～第6問の読解問題の総語数および全体に占める語数の割合である。読解問題の試験全体に占める語数の割合は大きい。配点の割合も145点(全体の72.5%)と非常に大きいことを考えると、長い英文を読めることが大変重要であることがわかる。英語多読はその対策として1つの有効な方法である。

第3問～第6問の総語数の推移

年	2009	2010	2011	2012	2013
総語数	3,609	3,016	3,328	3,556	3,742
試験全体に占める語数の割合(%)	82.73	85.36	88.79	87.93	87.12

本校における英語多読の取り組み

本校では授業時間内に全校で実施することは難しいため、高校1年生、2年生の特進コースの生徒た

ちが、週2回、8時から8時15分に英語多読に取り組んでいる。1週間に30分間、1か月に120分間、英語読書の時間として、生徒自らが主体となって校内で英語の本を読んでいる。また、学外でも英文読書に取り組みめるように本の貸し出しを行っている。さらに、夏休みの宿題として、英語の本を1冊読むことを課している。

当校の現在の蔵書数は400冊程度で、『英語多読完全ブックガイド』を参考にして、本を選定してきた。また、英語多読においては、SSS(Start with Simple Stories)の多読方式を採用している。この方式の長所は、読書の際「辞書を引かない」「わからないところはとばす」「つまらなければやめる」など、生徒の気持ちに負担をかけずに、継続が可能なように配慮できる点である。また、やさしい英文から読み始めるので、生徒は英文を比較的「すらすら」読むことができる。そのため、大学入試における「速読」に必要な速度に慣れることが可能である。さらに、すらすら読めれば英語読書は楽しいと感じられ、楽しいと感じられれば読書習慣が長続きし、継続できれば英語に触れる絶対量が増すので、多読の効果をより一層期待できる。読書の記録は、生徒たち自身が自分の読んだ本のタイトル、語数、感想などをそれぞれの読書記録手帳に記入している。

多読指導における教員のおもな役割は、各生徒の英語力にあった指導を実践することである。そのためには、まず、購入した本を全て読み、内容・レベルを把握する必要がある。次に、必要に応じて、生徒それぞれに合ったレベルの本を薦めていくことが大切である。これは、本の内容およびレベルに加え、生徒の英語力および興味をもっている分野などを把握していないとできない指導である。また、Cengage Learning 主催の「英語ジュニア読書大会」への応募の紹介や、多く本を読んだ生徒への表彰を通して、生徒たちの多読へのモチベーションを高めるよう努めている。

生徒間で助け合うこともある。本校では学年を超えて英語多読を実施しているため、自主的に先輩が後輩に多読の方法を教えたり、お薦めの本を紹介したりしている姿が見られる。

研究方法

今回、英語多読を行った生徒の英語力がどのよう

に伸長したかを計るため、英語多読を行った高校特進コースの生徒19名のGTEC for STUDENTSスコアの変化を確認した。GTEC for STUDENTSとはスコア型の英語の試験で、「読む・聞く・書く」の3技能を測ることができ、ライティング答案は海外で採点・添削される。また絶対評価なので技能別英語力の伸長度がわかる。2011年度は中高生49.5万人が受験し、受験者は主に公立・私立の中高一貫校の生徒が占めている。

さらに、同生徒19名とその2年前に多読を行わなかった特進コースの生徒19名との進研模試の結果を比較し考察した。

研究結果

成果を計る一環として、多読を始めてから約半年たったころ、2011年、高校1年生だった19名がGTEC for STUDENTSを受験し、リーディング、リスニング、ライティングの3技能を計測した。

Total	Reading	Listening	Writing	WPM
404.1	146.9	149.3	107.3	64.2
405	150	154	101	67

上段が本校の平均点であり、下段が全国の平均点である(以下同じ)。高校1年の時、本校の生徒はTotal, Reading, Listening, WPMの分野で全国平均を下回る結果となった。

多読を始めて1年半後の2012年12月、同生徒が2年生の時に、再びGTEC for STUDENTSを受験したところ、下表のとおり、全ての分野において全国の高校2年生の平均を上回った。特にReadingは全国平均より約22点高く、さらに合計では全国の高校3年生の平均461も超えた。これは多読の効果が現れたと考えられる。WPMが85語以上必要な大学入試センター試験に、高校2年生12月の時点で十分対応できるところまで近づいていた。

Total	Reading	Listening	Writing	WPM
472.1	172.2	181.2	118.7	80
445	150	172	105	67

もう1つの比較として、同生徒が2012年11月に

受験した進研模試の結果と多読を行っていないかっ
た一昨年度の特進コースの生徒 19 名の進研模試の結
果との比較を行った。

多読を導入する以前の生徒と、多読を導入後の生
徒では大きく偏差値において開きがあり、授業のカ
リキュラムは変わっていないことを考えると、これ
は多読の効果と考えられる。

多読を行った 19 名		多読を行わなかった 19 名	
偏差値	人数	偏差値	人数
65 以上	1	65 以上	1
60 以上	2	60 以上	0
55 以上	6	55 以上	1
50 以上	4	50 以上	4
45 以上	5	45 以上	5
40 以上	1	40 以上	7
35 以上	0	35 以上	1
平均	53.8	平均	47

また下記の表は、英語多読を行った 2 年間で生徒
が読んだ読了冊数と読了語数である。当初、教員側
が予想していた語数よりはるかに少ないのが現状で
あり、多読を継続することは生徒にとっては楽なこ
とではないことがわかった。

語数	人数
10 万語以上	3 人
9 万語以上	3 人
8 万語以上	5 人
7 万語以上	4 人
6 万語以上	3 人

下記の表は生徒が読んだ語数の分布図である。同
じクラスの生徒のなかでも、教員が予測していたと
おり英語力の差があり、同じテキストを使って一斉
授業で教えることだけでは、限界があるということが
、この分布を見ていただければわかるだろう。

	読了冊数	読了語数
平均	61 冊	91,952
最大	86 冊	157,821
最小	50 冊	56,947

効果・課題・今後に向けて

生徒の長文を読むことへの抵抗がなくなり、英語
力の向上が見られ、当初の目的を概ね達成できている。
しかし、「英語ジュニア読書大会」への応募などは行
ったものの、校内では朝学習として取り組んでお
り、成績に反映されることはないこと、テストも
なく単調になりやすいことから、日ごろから生徒全
員のモチベーションを保ち続けるのは難しかった。
この点をどう改善していくかが、目下の課題である。

今後は、さらに多読用図書を増やし、自発的な多
読の継続を促していく。また、多読に速読や多聴を
組み合わせた指導によって更に効果があるだろうと
考え、授業との連携を模索中である。

参考文献

- Day, R. and Bamford, J.(1998). Extensive reading in the second language classroom. Cambridge University Press.
- Day, R. and Bamford, J.(2004). Extensive reading activities for teaching language. Cambridge University Press.
- SSS 英語学習法研究会(2007)『英語多読記録手帳』コスモピア
- 教学社編集部(2014)『センター試験 過去問題大研究 英語』教学社
- 酒井邦秀・神田みなみ(2005)『教室で読む英語 100 万語—多読授業のすすめ』大修館書店
- スコア型英語検定 GTEC for STUDENTS 第 21 回 教師用帳票(2011)ベネッセコーポレーション
- スコア型英語検定 GTEC for STUDENTS 第 21 回 教師用帳票(2012)ベネッセコーポレーション
- 古川昭夫・神田みなみ編著(2010)『英語多読完全ブックガイド改訂第 3 版』コスモスピア

(村田女子中学校・村田女子高等学校教諭)